人工子宮がもたらす新たな世界

Interviewee
Dr. Evie Kendal

Q. 研究のバックグラウンドについて教えてください。

リプロダクションに関する生命倫理学者で、医学、公衆衛生、医療倫理のバックグラウンドがある。人工子宮やその他の生殖補助医療(ART)に関する研究を、主に倫理的な観点から行っている。モナシュ大学で医学の学位、文学士、修士号、博士号、ジェームズ・クック大学で公衆衛生学の修士号を取得している。モナシュ大学のドクターコースでの最初の指導教官は Catherine Mills で、指導教官の専門はバイオポリティクスと先端技術の倫理的・法的・社会的問題(ELSI)だった。

Q. フェミニストの視点からの生殖技術に関する研究について教えてください。

フェミニスト生命倫理学(Feminist Bioethics)というのは、女性が生殖技術に対して選択権とパワーをもつことに関わる研究分野だ。

私の研究論文は、リベラルフェミニズムの視点から書かれている(諸セクター間の不利益や格差を引き起こさないで選択肢を増やす)。政府が資金援助している ART に特に焦点をあてている。子供を持つ/持たない、どのような決定を女性がしようとも、より多くの自由とより多くの選択肢を女性が持てるようになることを目指している。

Q. 代理出産について、その倫理的問題をフェミニストの視点からどのように捉えますか?

代理母は、経済的・社会的な弱者で、富裕で力を持った依頼者によって搾取されていると考えている。代理母になる女性に対する搾取の危険性は途上国でとりわけ高い。その観点から見ると、生命工学によって人工的に子宮をつくることができれば、代理出産のような形で、妊娠出産を「外注する」必要性がなくなる。そして、女性でも、子供は欲しいが、自分で妊娠出産したくない場合は(代理出産のように他人の身体に頼ることなく)その希望を叶えることができる。

Q. 利他的代理出産と商業的代理出産に倫理面で違いはありますか。

@YURI HIBINO

色々な見方があると思う。一般的に、利他的代理出産はより問題が少ないと言われている。それは、金銭的なことが動機にならないので、より強制性が低いと考えられるから。しかし実際には強制の問題は生じていると思う。例えば、自分の家族からのプレッシャー、将来その子供と関係を築くことができるという期待、依頼者からのプレッシャーなど。

これは代理母だけでなく、すべての女性に言えることだ。実子を持つよう多大なプレッシャーをかけられ、そして現在のところ男性パートナーは代わりに出産することはできない。だから女性が妊娠したくない場合、選択肢は限られてくる。

商業的代理出産の問題点は、女性は金銭的利益のために自分の体を利用するべきではないという考えに集約される。だから、代理母になるならば金のためではなく、無償でやるべきであるという結論になる。しかし、妊娠することにかかる金銭コストはかなりのものであり、その上、時間も失う。これらのコストは、代理母が実際に支払っているものだが、利他的代理出産で用いられる補償モデル(compensation model)では認められず、支払われることはない。そこが問題だ。

あるフェミニストの団体は代理出産を搾取だといい、別の団体は女性はやりたいことをする自由があるべきだという。そしてまたほかの団体は、代理出産は完全に禁止されるべきだと主張する。

Q. オーストラリアで行われている“利他的代理出産”についての考えをお聞かせください(オーストラリアでは商業的代理出産は禁止されているが、近年、商業的な面が目立ってきています。あるエージェントは商業的代理出産のため外国に行く人たちを助けており、国内の利他的代理出産では、弁護士など専門家は代理出産で利益を得ています)。

私が参加したセミナーでは、依頼者と代理出産のブローカーが接触していた。それは気持ちの良いことではないし、法的にも疑わしいと思う。パンフレットを置いたテーブル並んだ展示会場では、たいていは白人男性がいる。彼は、代理出産プログラムを購入し、ふさわしい卵子ドナーを探す。その時は、リトアニアでの代理出産が紹介されていた。

私はオーストラリアの利他的代理出産に関する倫理的な問題について話すためにそのセミナーに出席し、代理母の福祉に関する懸念(例えば、死産、流産した場合など)があるが・・・と曖昧にコメントした。依頼者たちの望

みだけに焦点があてられるような雰囲気があった。

もし代理出産が自由な行いとして許されるのなら、商業的代理出産も適切に行われるように法律をきちんと整備して実施したらどうだろうかといつも考え、そのことで葛藤する。法律で禁止されているせいで、違法な代理出産が行われている可能性が高い。典型的なジレンマに陥っている。

Q. 男性または男性カップルが代理出産を依頼することについてどう思いますか。フェミニストの視点からどのように言えますか?

異性愛カップルのための代理出産と同等に扱うべきだと思っている。ゲイの権利と女性の権利は生命倫理の議論のなかで一緒くたにされることが多いがそれは有効だとは思わない。そのせいでフェミニストの視点がないがしろにされる可能性があるから。

Q. 子宮移植の問題は何だと思いますか。代理出産に代わる（合理的な）選択肢となり得るでしょうか。

子宮移植は、有望だと思っている。子宮移植が実現すれば、障害や健康上の理由で、子宮を持たない女性が、自分で子供を産みたい場合に代理出産に頼る必要がなくなる。

誰が移植を受けられるかの優先順位をつけるのは非常に難しく、しかも移植手術には大変な危険が伴う。救命行為であると言って移植のリスクを正当化することはできない(子宮移植は生命維持にかかわる手術ではなく、生命繁殖技術だから）。腎臓移植などのほかの臓器移植とはかなり異なっている。明らかに、手や顔の移植に近い。医学的に必要なものと、審美的な観点から望まれるものとの境界は曖昧だ。

Q. オーストラリアにおける子宮移植の現状はどうなっていますか。

昨年の初め、子宮移植に関する論文を書き上げた（その時点ではオーストラリアで子宮移植は試みられていなかった）。それ以後も出産が成功したとは聞いていないが、シドニーで臨床試験の目的で計画されていたのは間違いない。それについての情報は少ない。スウェーデンのチーム（Mats Brännström)がオーストラリアに来て関わっていたようだ。

Q. 体細胞からつくられた精子や卵子は社会やジェンダー構造にどのように影響を与えますか?

@YURI HIBINO

体細胞からの精子や卵子は、例えば、クローン作成のために使われるかもしれない。しかし、細胞が老化している懸念もある。

西欧文化は、遺伝子にこだわりすぎている嫌いがある。それは生産的ではないし持続的でもない。家父長制モデルから来ている(例えば父系を重視する相続法などの存在)。そこでは、女性のセックスへのアクセスを制限し、女性の身体をコントロールすることが理にかなっているとされていた。しかし言うまでもなくこのようなシステムはもはや適切ではない。人びとが本当の父親を見つけ出すことに執着すればするほど、遺伝子本質主義が増強するだけだ。それは生産的ではないし有益でもない。

人工的に作り出した配偶子や卵子や精子以外の体細胞の使用はたくさんの問題を生み出す。また、遺伝子ばかりにフォースとすることで、養子縁組をした家族にどのような傷をもたらすか考えることも重要だ。そうすれば、男性の優位性と遺伝子への執着を(同時に)掘り崩していくことができるだろう。

Q. もし人工子宮が導入されたら、社会やジェンダー構造にどのように影響を与えますか?

代理出産を使わないで生殖ができるようになるので、ジェンダー平等が実現される可能性がある。妊娠することはできても、妊娠したくない女性が世の中にはたくさんいる。また例えば、妊娠している女性に癌が見つかった場合、現時点では限られた選択肢しかないが、人工子宮ができれば、人工子宮で妊娠を継続することができる。

始めは人工子宮を用いて未熟児の命を救うことに焦点があてられるだろう。しかしそれは商業的代理出産と場合と似たリスクがある。高額な費用がかかるため、金銭的に余裕のない人は利用できない。

Q. フェミニスト倫理学の観点から、代理出産と子宮移植と人工子宮を比較して何が言えるでしょうか?

子宮移植はこの中で少し特殊だ。子宮を提供するほうもされるほうもとても負担がかかる。代理出産の場合は負担のほとんどは代理母にかかる。

倫理学では、害を最小にすることに焦点を当てる。もし最終的な目標が搾取を回避することならば、子宮移植や代理出産ではなく、人工子宮の技術に私たちの全リソースを投入すべきだ。子宮移植にしても代理出産にしても、何がしかの搾取の可能性があるから。

結論としては、人工子宮が一番良い選択肢だと思う。人工子宮は、人体とは切り離された人工の環境だから、今あるかなりの問題を回避できる可能性がある。しかし、人工子宮によって女性は別の新たな課題に直面する可能性がある。たとえば、人工子宮を用いた生殖では、中絶はできないと言われてしまったり、逆に、子どもを育てるのにふさわしい生活レベルに達していないと判断される場合は、人工子宮を用いて子どもを持つ許可が下りないなど、差別の可能性がある。 だから、人工子宮は適切な規制のもとで開発・利用すべきだ。そうでなければ、それは、女性の差別を助長することにもなりうる。

Q. これに関連するほかの問題はありますか。

生殖技術に対するフェミニストの視点は相反する見方を余儀なくされる。不妊治療の研究者の多くが男性であり、結局はこの技術は女性に子どもを持つことを強制することになるだけだという懸念が大いにある。体外受精などは不妊であるが故の社会的排除を減らしたが、現在多くの人は実の子どもが欲しければ体外受精を望む“べきだ”と思い込んでしまっている。その結果、養子縁組はある意味残念賞と捉えられているようだ（養子縁組にとっては良くない傾向だ。代理出産などよりは間違いなく道徳的には優れているのに）。そのせいで、女性たちは別の義務を押し付けられている。それは、もし子どもを持たないのなら、持たないことを正当化しなければならないということだ。

生殖補助医療が女性をディスエンパワーしているのなら、禁止されるべきだという議論がある。しかし、これは選択の自由に反している。(一部のフェミニストの反対にもかかわらず)女性たちはむしろ喜んでそのような技術を利用してきた。だから、十分に考慮された規制が重要だ。この分野に関するフェミニズム研究は広範囲で分野横断的になる。

遺伝子は、社会化と同じだという妄想がある。それは遺伝子を共有しているだけで多くの共通点を持つことができるというロマンチックな思い込みで、事実ではない。

Q. 人工子宮が完成すれば男女の関係の崩壊につながると思いますか。

人工子宮が男性による女性殺害(femicide)につながるという議論がある。しかし人は妊娠という要素以外にも、社会的、性的など多くの理由で関係を求めるものだという反論がある。

人工生殖が自然生殖に完全に取って代わることはないと思う。すべてはバランスをとって、搾取を最小限に抑えるということだ。

技術が発展すれば、男女の関係も変わる。しかし、技術が人間関係や家族という単位に取って代わることはないと思う。このような懸念は体外受精のときにもあげられたが、実際にはそのようなことにはなっていない。

Q. フェミニスト研究の研究者がオーストラリアでサポートを受けることは困難なことですか。

オーストラリアではジェンダーやフェミニストの研究には多大なサポートがある。フェミニスト生命倫理学者はネット上で批判されるなどはあるが、助成金申請の面では不利益を被っていない。しかし、PhD を指導してくれる教員を見つけるのには苦労した。ほかの分野なら指導教員を見つけるのはそれほど難しくはなかった。哲学科はいまだに男性教員によって占められていた。これはキャリアの遅れにつながり、直接的ではないにしろ不利益を被ったことになる。しかし、学部のスタッフの多くはフェミニストの視点を意識していたので、大きな障害はなかった。

Q. 理想的な子宮ドナーとはどのようなものだと思いますか。

利他的代理出産に似ているが、子宮のドナーはドナーの母親や姉妹であることが多い。死んだ人からの提供もある。死体からの提供であれば、おそらくそれほど複雑な問題はないのではないか。

腎臓の提供と同じようにドナーはスクリーニングを経る必要がある。大きな手術だ。ある研究は生体ドナーと死体ドナーでは、生着率に違いがあると指摘している。子宮の場合は、大きな血管も含めて移植する必要がある。だから死体ドナーのほうがやりやすい。

現時点ではどちらの移植がより成功率が高いかというデータはない。

強制の問題があるので、(生体)ドナーを必要とする移植医療は厄介だ。女性は犠牲を払いたがるものだ/払うべきだと考えられている。レシピエントを助けたい、そしてレシピエントが親族の場合、(自分にとって姪や甥にあたる)子どもが生まれてくるのを助けたいと思うものだとされている。それゆえに慎重につくられた規制が必要だと思う。

年齢制限は不要だ。正しいホルモンレベルであれば 60 代の女性でも妊娠できる。卵子の年齢は重要だが、移植される子宮の年齢はそうではない。

(2019 年 11 月)

Evie Kendal　Link

生命倫理学者で、先端技術、ヘルスコミュニケーションおよび文学を専門とする公衆衛生科学者。現職は Swinburne University（メルボルン・オーストラリア）講師

論文:

Kendal, Evie ; 2020. Pregnant people, inseminators and tissues of human origin: how ectogenesis challenges the concept of abortion, Monash Bioethics Review, Vol. 38, no. 2 (Dec 2020), pp. 197-204

Kendal, Evie ; 2018. Utopian Literature and Bioethics: Exploring Reproductive Difference and Gender Equality, Literature and Medicine, Vol. 36, no. 1 (Mar 2018), pp. 56-84

著書:

Kendal, Evie ; 2015. Equal Opportunity and the Case for State Sponsored Ectogenesis,

用語説明:

--人工子宮　子宮を介さずに母体の外で胚から育て、そのまま誕生させる方法

--代理出産　第三者の女性に妊娠・出産してもらう方法

--子宮移植　子宮を生体または死体から移植すること。移植された子宮を用いて妊娠・出産することを最終的な目的とする。